

**第１８４回（11月）例会　参加費300円**

**アジアの平和と非同盟主義**

**ＡＳＥＡＮ(東南アジア諸国連合)の歩み**

**お話：鈴木 祐司さん**

**法政大学名誉教授、日本ユネスコ協会連盟理事長**

**日時:１１月６日(日)13:30～**

**場所:教育会館201会議室**

**第１８５回（12月）例会　参加費300円**

**もう始まっている多民族・多文化共生社会**

**まっとうな入管・移民政策を**

**お話：鳥井 一平さん**

**移住者と連帯する全国ネットワーク代表理事**

**日時:１２月１８日(日)13:30～**

**場所:たづくり1001学習室**

**第１８６回（1月）例会　 参加費300円**

**戦争する日本にさせないために**

**大軍拡と９条改憲を考える**

**お話：末浪 靖司さん**

**ジャーナリスト、調布市在住**

**日時:２０２３年１月８日(日)13:30～**

**場所:たづくり1001学習室**

**大本営地下壕と東京裁判法廷**

**▼やはり現地に行ってみるもの**

　やっぱり、現地に行って見るものですね。大講堂（[復元]）の展示と解説では、｢陛下｣に注目を集め、｢陛下｣から｢臣下｣を見おろす構造になっている、つまり天皇が臨席した場所であることばかりが印象付けられました。東京裁判の法廷であったこと、つまり戦争責任を問う裁判が行われた場所であることが視覚に残らない。「復元」がどこまで真実を伝えているのか、という目を持たなければと思いました。ドイツのニュルンベルグ裁判記念館を思い出しました。ドイツでは現在も裁判所である建物の一部に「ニュルンベルグ裁判記念館」の名で、国際軍事法廷の世界史的意義を展示しています。日本での極東国際軍事裁判が「市ヶ谷記念館」の名でぼかされているのと対照的です。帝国陸海軍が連合国に敗北し占領解体された史実を｢忘却｣＝｢抹消｣して、現在の自衛隊がアメリカ軍に従属している「日米同盟」の現実からも目をそらす展示だと感じます。また、前列に天皇、東條、鈴木貫太郎が並ぶ大きな写真**（左上写真）**が展示されていました。１９３４(昭和９)年11月に行われた「陸軍特別大演習並地方行幸」の大演習第３日（13日）「記念撮影ノ為全将校ノ集合（歩兵第十五聯隊営庭）」と思われます。毎年の大演習と行幸は、該当地域の官民挙げての天皇制宣伝イベントでしたが、この写真撮影後の16日に先導車が道を間違え案内の警部が引責自殺を図る事件がありました。

　（若葉町・むらき数子）

▼**天皇制の下での国民の犠牲を実感**

　興味津々で参加しました。地下壕跡は見学範囲が限られ、元の施設は撤去されむきだしのコンクリートの壁から想像するだけでした。その後の防衛省の施設内見学。案内の職員の丁寧でくだけた対応が意外でした。イメージアップのためでしょうか？　市ヶ谷記念館は陸軍士官学校本部として建てられた建物の一部を移設・復元したもの。講堂は東京裁判が行われた場所。床板も当時の物を使ってあるとか。グッと歴史を感じました。また、三島由紀夫の立てこもった部屋、バルコニーも見学、当時日本刀で切りつけた傷が木の扉に残され　背中がゾクリとしました。最後に厚生棟へ行き、｢お土産をどうぞ｣と言われました。普通のクッキーや煎餅が並んでいますが名前が面白いのでメモしてきました。｢炎の大作戦｣(饅頭)・｢撃せんべい｣･｢迷彩パウンドケーキ」など。あとはお馴染みの｢海軍カレー」、Ｔシャツも様々な柄や文字が描いてありましたが、さすが自衛隊Ｔシャツと思ったのは｢俺が守る。お前を守る｣･「１使命の自覚・２個人の充実・３責任の遂行・４規律の厳守・５団結の強化」など背中に大きく刷り込まれていました。庁内の施設はほぼ撮影禁止、お土産売り場まで禁止でした。見学ツアーを通して「日本が明治以降、天皇制の下で如何に国民が犠牲になったか」改めて感じました。

（大橋美知代･調布ヶ丘）

**▼天皇の存在をここまで！？**

　堀川恵子｢暁の宇品｣、半藤一利｢昭和史｣に触発されて興味が湧き、大本営見学に参加した。昭和16年造の地下壕はトンネル状のものをつないだ実質本意？のものだったが、驚いたのは昭和９年に建てられ、保存の為に20年前に移築された、陸軍士官学校の講堂(極東裁判の会場！)だった。遠近法を使うなど、「天皇の存在をここまで！？」というほど意識した贅沢な造り。市ヶ谷台の現防衛省の広大な敷地は尾張徳川のものだった由。

(深大寺北町･二見真由美)

**▼何とも「重たい」気分でした**

　大本営地下壕、東京裁判の法廷などが見学できるというので、その場に身を置いて考えてみたいと思い、この企画が提案されたとき、真っ先に手を挙げて参加しましたが、この「重たい」気分はどこからきているのか。立て板に水のガイドの説明、展示物の説明、･･･どこを見ても、聞いても「あの戦争は二度とくりかえさない」という気概が感じられないのです。先日の国葬の後で、前川喜平氏が国葬の黙祷の際、自衛隊音楽隊が演奏した「國の鎮め」のことを批判していたが（「東京新聞」10月２日）、それを思い出しました。現在の防衛省・自衛隊は旧軍の伝統を引き継いでいるということは、いろいろなところで言われていますが、そのうち、これ等の展示の中に、山縣有朋がつくったとされる「軍人勅諭」が盛られるのではないか。そんな危惧が気分を重たくさせているのかも知れません。　（仙川町・岩本努）

▼**戦争は昔のことではない**

　「百年は短い」というのが80歳を超えての実感です。「戦争の昭和」はそんなに遠いことではありません。「すでに戦中」という状況を見聞きして久しく、若い人たちに申し訳なく思ってきました。防衛省施設内の戦争遺跡を目の当たりにして、過酷な国民的体験を平和への財産にしてゆかなくては、と改めて思いました。そして、日本の戦争は昔のことではない、と若い人たちに語りかけたいと思いました。

　（ 森本早智子・菊野台）

**調布｢憲法ひろば｣例会のご案内**

**第１８３回**

**憲法ひろば**

**2022/10/13**

**参加者の**

**感　想**

第**210**号（２面）**2022年10月19日**

**発行:調布九条の会「憲法ひろば」**

**E-Mail：chofu9jou@yahoo.co.jp　WEBサイトhttp://www.geocities.jp/chofu9jou/index.html**